

## 引用からみた日本陽明学の特徴 －中国の陽明学と比較して－

川口 武尊

陽明学とは王陽明がおこした儒教の一派であり、朱子学の批判から生まれ、「知行合一」「心即理」「致良知」の三つの説を中心とする学問である。陽明学は多彩な側面を持つと言われている。陽明学は日本に渡り、独自の進化を遂げたとされており、実践を強調した行動哲学であると考えられている。儒学では四書五経を中心とする経書からの引用が多くみられ、それは陽明学も例外ではない。先行研究では日本陽明学に着目した研究はあるが、陽明学者の著書の引用に着目した研究は見られなかった。そこで日中の陽明学者がどのような文献をどのような意味合いでどの程度引用しているのかということ进行调查し、多彩な側面を持つ陽明学のどのような部分に共鳴したのかということを知り、日本で陽明学がどのように受容されたのかということをはっきりさせることを目的とする。

本研究では陽明学者の著書を用いた文献調査を行う。研究対象として日本の陽明学者三名と中国の陽明学者三名を選び、その著書から調査を行った。日本の陽明学者からは中江藤樹、熊沢蕃山、大塩平八郎を選び中江藤樹の著書である『翁問答』、熊沢蕃山の著書である『集義和書』、大塩平八郎の著書である『洗心洞劄記』を用い調査を行った。中国の陽明学者からは欧陽南野、王龍溪、李卓吾を選び欧陽南野の『書簡』、王龍溪の『書簡』と『會語』、李卓吾の著書である『焚書』を用い調査を行った。本研究では日中それぞれの陽明学者が自身の著作でどのような文献をどの程度引用しているのかという調査と王陽明の主著である『伝習録』のどのような部分を引用し、どのように解釈しているのかという調査を行った。

日中それぞれの陽明学者が自身の著作でどのような文献をどの程度引用しているのかという調査では全ての陽明学者が四書からの引用が多いという結果が得られた。また日本の陽明学者は王陽明の文献と同程度、朱子の文献も引用しているのに対し、中国の陽明学者は朱子の文献からはほとんど引用していないということが分かった。また王陽明の主著である『伝習録』に関する引用の調査では、日本の陽明学者は『伝習録』の功夫についての部分を多く引用しており、中国の陽明学者は『伝習録』の語句に関する説明の部分を多く引用していることが分かった。また日本の陽明学者は『伝習録』の朱子の考えに賛同を示している部分や朱子を無理にあげつらうことを批判している部分を引用しているのに対し、中国の陽明学者からはそのような傾向は見られなかった。

以上の調査結果から日本の陽明学者は陽明学の実践的な部分を多く引用しているのに対し、中国の陽明学者は語句の解釈を重要視していたと考えられる。日本の陽明学者は語句の解釈に関しては、学派というものにあまり執着せず自身の内得出来る解釈を採用したと考えられる。今後はより研究範囲を広め、多くの陽明学者の多くの著書の引用に着目したい。

(指導教員 松本浩一)